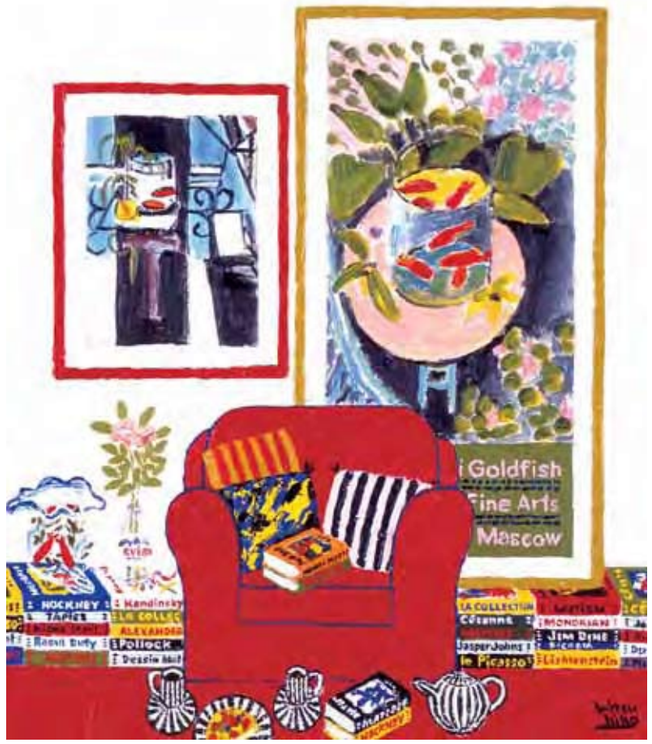
赤の時代

画家　笹尾光彦

取材・文　加藤亜玲



その空間には赤いソファがひとつ
ティーカップのセット、読みかけの本
ここは誰の部屋？
そのソファには誰が座るの？
わくわくする想像を
かき立てられずにはいられない
赤、赤、赤
まばゆいまでにあふれる色彩
めくるめく赤の世界

Red Sofa

「マティスは中学・高校時代から一貫して今も好きです。その理由は、世界中のマティスファンと同じでしょうが、きっと幸せな気分にしてくれるからと思います。色彩、特に赤の使い方などは大いに影響を受けていますね。僕にとっては、学ぶことの多い、古典のようなものです」

代表作であるRed Sofa

赤く描かれたこの部屋、描き手である笹尾光彦さんの部屋である。本人も「自分の原点」という、このRed Sofaシリーズ。この絵を描きながら、次の描くものが見えてくる。

「私の部屋を、つまりもっとも身近なシーンを描いたものです。私が目指しているのは室内画というべきジャンルなので、まさにこのシリーズは私の原点ということになりますね」

笹尾さんが三〇年以上関わってきた広告代理店の仕事を退職したのは定年まであと三年というとき。「カミさんとは、広告ビジネスの世界からなるべく早く抜け出して、将来は田舎かパリでゆっくり暮らすと約束をしていました。だから『どうしてもっと早く辞めなかったの？』と言われたくらいなんです」

クリエイティブディレクターとしてCMの仕事をこなしながらも、空いたわずかな時間には陶芸の教室に通った。そして油絵の作品を少しづつ手がけ、百貨店で展覧会を開くこと計六回。

五七歳で念願のBunkamuraギャラリーでデビューを果たし、画家としての人生をスタートさせた。以来、一貫してコップに差したハイビスカスやバラの垣根、おいしそうなタルトなど、常に身近なものを描いて発表している。

自分を表現できるもの

笹尾さんが画家という職業にたどり着くまでの道のりは、幼少時代へと逆のぼる。日本画家であった父親の影響もあってか、物心ついたときにはすでに絵に没頭していた。

「ほら、僕の絵は遠近法も使っていないし、影もつけていないでしょう。いつからというのも覚えていないほど小さいころから、気づくとフラットに絵を描くようになっていました」

持って生まれた個性に、自信を与えてくれた出来事が中学時代に起こる。美術の時間にスケッチした絵を先生が「みんなと違っているからいい」と言って、クラスメートの前でほめてくれたのだった。

「ほかの人はお城や花などを描いていたのに、僕は違うほうを向いて、校舎の窓なんかを描いたんですよ。いつもみんなと違う方向を向いていましたし。今考えると変な子どもでしたよ」

White Wall and Roses

画家になる予感

高校生になると美術部に入部。デッサンに明け暮れる日々が始まる。

「油絵の基礎はやっぱり高校時代にできたと思います。美術部の顧問であった先生の開くアトリエに通っていたのですが、平日でも五〜六時間、休みの日ともなればそれこそ朝から晩までデッサンや水彩スケッチをしていました。毎日大きなコッペパンをひとつ買って、持っていったことを覚えていますね。外側は食べてしまうんですが、中身は消しゴムとして使うんです。学校以外のほとんどの時間を絵に費やして、この3年間みっちり勉強したことが今のベースになっているんでしょうね」

その後、東京の美術大学に進んだ笹尾さんはデザインを専攻。そして将来の仕事に選んだのはデザイナーの道だった。

「小さい頃はやはり画家になるんだと思っていましたが、この頃はすでに自分のなかで職業としての画家を想像できなくなっていたこともあり、現実的な生活を考えてのまっとうな選択でした」

卒業後は印刷会社のデザイナーを経て、広告代理店でクリエイティブディレクターとして活躍する忙しい日々。そんななかで画家になろうという気持ちを再び思い起こされたきっかけは、捨てられていた額縁だった。

「四五歳のときでした。ある日、カミさんが近所のごみ捨て場で古い額縁を拾ってきたんですよ。『あなたは絵が上手いから何か描いたら?』と言って。それで色を塗り直し、バラの絵を描いてみると、油絵の感覚が蘇ってきた感じがしました。衝撃的に、というわけではないにしろ、また絵を描いてみたいと思うようになりました」

笹尾さんの中で、一度は消えかけていた絵に対する想いに、ぽっと静かに火のついた瞬間だった。

Books and Flowers

いつしかついた呼び名は「赤の画家」。「見た人を元気にさせたいという気持ちはいつももっていますが、赤を使うと落ちつく自分がいるようです」

Books and Flowers

「東京で一番好きなギャラリーがBunkamuraでした。だから、絶対に個展を開くならばここと決めていたんです」

一九九八年に初めての個展を開き、デビューをした際に発表されたのが、この本と花をテーマにしたシリーズである。「大好きな画家」マティスの画集五〇冊ほどを集めて、一冊づつ花と組み合わせて描いていった。ほかにも、Aなら『Anemone』など、A〜Zまでのアルファベットで始まる花を描いたシリーズもある。その数はあわせて八〇点以上。

「本を描くと、必然的に文字も描くことになりますが、絵の中にレタリングがあるというのも好きな理由です」

レタリングとはデザインをされた文字のこと。たとえば『MATISEE』という綴りに注目してみると、活字にしてしまえば無表情なアルファベットの組み合わせも、笹尾さんのフィルターを通して描かれることで、一枚一枚、一文字一文字が絵として変換され、活き活きとした表情を持ちえている点がおもしろい。

A Florists in Paris

のちに高校の同級生である直木賞作家の村松友視は、笹尾さんの絵の魅力を次のように述べている。「何という大らかさ、あかるさ、自然さ、無邪気さ、そして程よい力感と緊張感だろう。笹尾作品は、他のどんな作品ともかさならぬ、特異ともいえる強い個性に輝いていた」

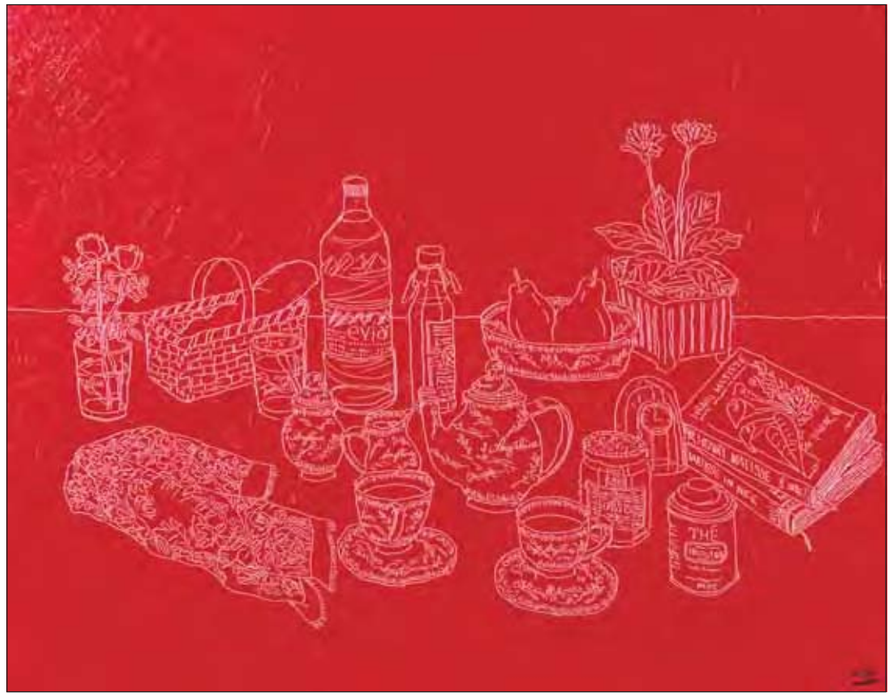
A Florists in Paris

好きな美術館がたくさんあり、街中にカフェもあるパリには広告の仕事で何度も足を運んだ。

「何度行っても飽きない、何度でも行きたいと思わされる場所ですね。センスが合っているような気がしています。そんな大好きなパリの街並みを表現したいと、花屋さんを描き始めたのですが、一軒として同じお店がないことが面白くて一〇〇軒以上になりました」

パリ中を歩き回ったことで、普段使わない色にも出会えた。

「建物とオーニング、その店名やレタリング、二階の窓の格子まで、とにかくそれぞれにまったく違う味がある。街にも人にもエネルギーがあふれていて、あぁ、これがパリだと思うのです」



Drawing

一面に塗られた赤から白い線が顔を出す。「ドローイング」という技法の範囲は広く、クロッキー、デッサンなど全体を表すこともあるが、このシリーズの場合は素描（スケッチ）に近いものだ。

Drawing

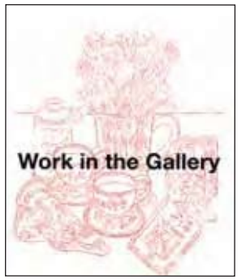
『Books and Flowers』を描いている中で、下地の色を鉛筆で掘って表現した箇所があったのです。その手法が面白くて始めたシリーズで『Drawing』と名づけました」

近くで見ると、削られた絵の具がぽこぽこと盛り上がり、触覚にも訴えかけられる。

「筆を使って絵の具で描く方法よりも、この方が不器用な線になるのですが、その自由さがいつも新鮮な感覚にしてくれます」

ところで同じモチーフを何枚も描く理由は何なのだろうか。

「最初から同じモチーフをシリーズとして描こうとしているわけではなく、結果として何枚ものシリーズとなってしまうのですよ。一枚では表現ができないということと、広告やデザインをやっていたことも関係あるのかもしれません」



A Florists in Paris

駅から続くけやき並木と桜並木を越え、住宅街にひっそりと佇む一軒家。一歩足を踏み入れると玄関に並べて飾られたポストカード、無造作に置かれた靴ブラシ、そのひとつひとつに丁寧な暮らしぶりが感じられる。

「全部カミさんの趣味に任せきりなんです」と、さすがの笹尾さんもそのセンスには頭が上がらない。

庭に置かれたテーブルの上にはティーセットが置かれている。木の葉が織りなすサンシェードのおかげで、突き刺す日差しもここではまばゆい光に変わる。ここでお茶を楽しみ、おしゃべりを聞くときが至福の時間だという。

トランプでゲームをして、負けた方がお茶を入れるというのが笹尾家のルール。最近はもっぱら笹尾さんがお茶を入れる係になってしまったという。

「仕事を辞めてから、なぜかギャンブルが弱くなってしまったんです。ほかにも変わったことはたくさんあるんでしょうけれど、一番感じるのはそこですね（笑）」

笹尾さんの話を聞いていると、家全体の調和がもたらす静寂のせいだろうか、時間も空気の流れさえもいつもと違って感じられる。まるで日常の世界から切り取られたような空間がここにある。

一歩一歩、新鮮さを求めて

「いままでの仕事は、偶然にもみんな僕の絵を見て、つながった人たちから生まれてきました。そういう出会いを個人同士で持てることはとてもうれしいですね」

今年の個展では華道家元池坊とコラボレーションをして、生け花を油絵で描くというまったく新しい試みを行い、好評を博した。

「はじめて個展に来てくれる人はもちろんですが、毎年来てくれる人も、いつも驚かせたいという気持ちを持っています。画家としてやる以上はきちんとやりたいですし、そのために自分も新鮮でありたいと思っています」

そんな気持ちは、いまでも朝の九時から夜の九時まで、毎日一〇時間以上もキャンバスに向かうというひたむきな姿勢となってあらわれている。

コツコツ、先へ先へ

よいものを生み出していくための心構えは、コツコツと根気よく仕事をすること。さらに笹尾作品が幅広い年齢層の人々の心をつかみ続けているのは、新しいものも取り入れて行く前向きさはもちろんのこと、自分の描き出す絵に対する情熱があってこそなせる技だろう。

「この先の目標はニューヨークと中国、そしてパリで個展を開くことですね。私の絵は、よく西洋風だと言われるのですが、もちろん東洋らしい部分もたくさんあるので、欧米の人にはそこを見てもらいたいと思います。また、日本文化の原点になっているのが中国。独自の文化を歩んで長い時間が経ったいま、どう評価してもらえるのかが気になります」

そう、笹尾さんの画家人生はまだ序盤。これからも先へ先へと続いていく。

父親は九〇歳まで絵を描いていた。自身も生涯現役でやれることをやりたくて、画家の道を選んだ。「いまの若い人たちは情報をたくさん持ちすぎていることで、急ぎすぎているように感じますね。もっとゆっくり生きてほしい。一〇〇回負けたっていいんですから。またチャンスがめぐってきますよ」

おだやかに話す笹尾さんの目は、丸いめがねの奥で少年のようにきらめいていた。

笹尾光彦（ささお・みつひこ）

静岡県生まれ。日本画家の父の影響で、幼い頃より絵に興味を持つ。多摩美術大学図案科卒業。大手印刷所デザイナー、外資系広告代理店クリエイティブディレクター、制作担当副社長を務め、広告業界で活躍。引退後は、画業に専念。赤を基調とした作品を数多く描き、優れた色彩感覚とモダンな作風で人気を集めている。

今後の展覧会予定

「パリの花屋さんと花のある日々
笹尾光彦絵画展」

会　期：2008年11月26日（水）～12月2日（火）
会　場：大丸東京店10階アートギャラリー
問合せ：03・3212・8011

「IDÉE＋SASAO and Tatsuya Kato 展」

会　期：2008年12月開催予定
会　場：IDÉEインテリアショップ自由が丘店
問合せ：03・5701・7559

笹尾作品が飾ってある場所

アラヤ株式会社
東京都目黒区中目黒1・1・71
ニールセンビル2F
問合せ：03・5773・1811
※見学ご希望の場合には事前に必ず電話でご連絡ください。

キルフェボン銀座店
東京都中央区銀座2・4・5
営業時間　11：00～21：00　年中無休
（カフェスペースは平日12：00～20：00、土日祝11：00～20：00）
問合せ：03・5159・0605

キルフェボン名古屋店
名古屋市中区栄3・16・1松坂屋南館1F
営業時間　10：00～20：00　不定休
問合せ：052・259・7675

Present

パリの雰囲気がいっぱいつまった初の写真集、『パリの花屋さん。』（リトルモア刊）を抽選で20名の方にプレゼントします。ご希望の方は、住所・氏名・連絡先（電話番号やメールアドレス）・年齢・職業・TOIROの感想をお書き添えの上、はがき、またはEメール（件名を「パリの花屋さんプレゼント応募」としてください）でご応募ください。応募期間は平成20年8月31日～平成20年10月31日（当日消印有効）。なお、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

応募あて先
〒181-0005　東京都三鷹市中原4-12-12アイランド202
株式会社フィリック・フォビック社　TOIRO編集部　TOIRO赤秋「パリの花屋さんプレゼント応募」係
Eメール：office@philic-phobic.com